

# みんぱく 私の逸品 『夷酋列像図』

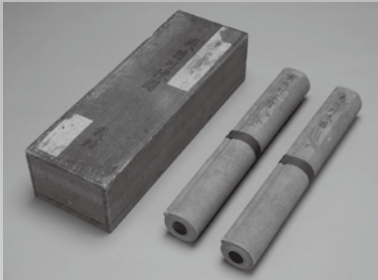
本館の図書室には『夷酋列像図』と称する資料がある。これは一人のアイヌの有力者をモデルにした人物画で、一八世紀末に松前藩の家老だった蠣崎波響という画家が描いた『夷酋列像』の写本のひとつである。絵の質としては原画の『夷酋列像』には及ばないが、この写本の価値は、筆頭老中として寛政の改革をおこない、二七九(寛政四年)のロシア使節の根室来航にも対応した松平定信が所持していたと伝えられている点にある。定信は老中に在任中は蝦夷地の経営に消極的だったといわれるが、このような写本を所持していたとすると、北方に対する情報収集は怠りなかったようである。

原本の『夷酋列像』は、一七八九(寛政元年)に起きたクナシリ・メナシの戦いと関係が深い。一八世紀後半現在の北海道東部(メナシ地方)とクナシリ島のアイヌたちは、そこに進出した飛騨屋に雇われた和人たちからひどい搾取と無法な扱いを受けていた。それに堪えかねた一部の人びとがこの年に武装蜂起し、和人側に七一人の犠牲者が出た。松前藩は鎮圧部隊を送ったが、アイヌ側は長老たちが蜂起した者の説得に当たり、結局全員投降した後、松前藩の命令で首謀格とされた三七名が処刑された。松前側は長老たちを松前城下に連れてきて藩への服従を誓わせたが、さらに彼らをモデルにした人物画を蠣崎波響に描かせたのである。

この絵は実際の人物を写した肖像画ではない。当時の人物画の技法を使い、蝦夷錦やロシア外套を着せて、アイヌの異人性を際立たせるように描かれている。製作直後からアイヌ人物画の傑作として高く評価されて、数多くの写本、模本が作られ、いわば松前藩の広報役を演じた。しかし、描かれた人物にじっと目をこらすと、その奥から虐げられてきた人びとの悲しげな声が聞こえてくる気がしてならない。

図書資料番号  
F104007177  
F104011165  
日本国

民博 民族社会研究部  
佐々木史郎



## 関連企画展のお知らせ

アジアの境界を越えて

会期：12月7日(火)まで開催中

会場：国立民族学博物館企画展示場A

ながい歴史のなかで、アジアには、国がもうけた境界や人びとの活動にあらわれた境界などさまざまな「境界」を見出すことができます。古代と近現代を比較することで、境界の姿を映し出すとともに、現代において境界のもつ意味を考える場を提供することができれば幸いです。